



菅波 茂

「岡山発の国際貢献を考える会」が発足した。元国連事務次長の明石康氏を会長とする7人の委員会である。私も委員の一人である。石井正弘知事の「国際貢献先進県おかやま」を実現するためである。

目的は国際貢献を地域振興に活用することである。世界の金、人、情報などをいかに岡山に呼び込むか。大切なことは「世界が必要とする岡山県」である。「岡山県には世界が必要とするものがあるのか」ということは素朴な疑問であろう。しかし、自信を持って答えたい。「当然である。石井知事のイニシアチフで政策として体系化できるか否か

だけである」と。

大化けするや！「新国際化推進プラン」

県発行の「新おかやま国際化推進プラン」

に、考えられる戦術的な項目はほぼ出尽くしている。国際

感覚養成、共生社会創造国際化、国際交流推進、国際貢献先進県おかやま、経済国際化推進、ハートフルおかやま国際化、そしておかやま情報発信国際化プログラムなど、それぞれに特性があり、密接な関連性がある。実践されてきた歴史

もある。今後、どの項目に人と予算を重点的につぎ込

むのかという、優先順位の問題だけである。

「なぜ岡山から国際貢献なのか」「地方の自治体が重要な県民の税金を国家がするようなことに使って良いのか」。もっともな質問である

が、「歴史に学んでほしい」と答えたい。明治維新では当初、薩長土肥が勤皇派であったが、残ったのは薩長である。なぜか。抜け買いである。密貿易である。徳川幕府は海外貿易を独占していた。否、日本の歴代の政権が御朱印船の名のもとに、海外との貿易による利益を独占していた。薩摩藩は琉球に加えて南蛮貿易、長州は朝鮮貿易により明治維新に必要な財源を確保した。

貿易に従事していたのは回船問屋である。明治維新の逸話として高杉晋作の奇兵隊があまりにも有名であるが、興

味深いのは誰が奇兵隊の軍備を用意したのかということだ。歴史は沈黙している。回船問屋の白石屋である。明治維新に学ぶべきことは、地方が直接に海外とビジネスする意義である。

「岡山発の国際貢献を考える会」が早急になすべきことは「新おかやま国際化推進プラン」を世界の人たちのために活用するためのコンセプトづくりである。コンセプトなき国際貢献は迷走するのみ。明石会長は「人間の安全保障」のコンセプトを紹介された。「新おかやま国際化推進プラン」の画竜点睛はコンセプト形成とそれを実施するための国際ネットワークの構築である。大化けするや！「新おかやま国際化推進プラン」。

（アジア医師連絡協議会代表、題字は筆者）